音楽で訴える真の平和

群馬大学共同教育学部附属中学校　三年　阿佐美　香帆

気付けば私は、その音楽に耳を傾け、画面の前に立ち尽くしていました。楽団の演奏家が奏でる柔らかく透き通るハーモニーは単純な音楽ではなく、平和への祈りと戦争への怒りを訴えているようでした。私は、音楽には言語の壁がなく、武器や争いを用いなくても自分の思いを伝え訴えかけられることを知り、その深さと思いを届ける力に改めて感動しました。

「ウクライナへ祈りを込め、東京都交響楽団がウクライナ作曲家の作品を演奏しました。」二月から始まったウクライナ侵攻。現地の苦しい状況を報じるニュースに胸が締め付けられる日々。そんな中私は、東京都交響楽団がウクライナ作曲家の作品を演奏した、というニュースを知りました。会場にいた一三〇〇人の観客の中にはウクライナ駐日大使の姿もあり、追悼するように目を瞑り、涙を堪えていました。

このニュースをきっかけに、自身が所属する音楽部での体験を思い出しました。音楽部では、感染症の影響で録音審査での大会出場や部活動休止が余儀なくされ、観客のいる本番を味わえない時間が長くありました。そのため、満員近くまで観客の入ったホールで合唱をした昨年の全国大会は忘れることができません。大会で私たちは「困難があっても歌を歌い、心に太陽をもて」と語る曲を通し、苦しくても歌で心を繋ぎ、前を向こうという思いを訴えました。演奏が終わると、観客席から拍手が響き渡り、笑顔や涙をこぼす人の姿も見えました。私は思いが溢れ、目の前に広がる美しい景色に心を打たれました。コロナ禍で人との距離を取り、心が離れる感覚を感じていたため、歌によって大勢の観客に音楽の観客に楽しさと素晴らしさを訴えられたことへの大きな喜びがありました。そして、音楽に集中したあの数分間は、苦しい状況を忘れ、互いに勇気と笑顔を分け合えた時間でした。全国大会を最後に先輩が引退すると音楽部は本部員一四人の編成になりました。感染症により、再び部活動が休止され、大会への出場は叶いませんでした。この期間私は、上級生としての責任感や仲間と歌うことのできない悔しさを感じていました。だからこそ部活動が再開されると、仲間と奏でたハーモニーに心が震え、歌えることの幸せを感じました。休憩中の他愛もない会話や演奏中の仲間の笑顔。そのすべてに励まされ、音楽を通して互いの存在の大きさを知ったのです。

ウクライナでの戦争により苦しんでいるのは、そして、音楽の力を必要としているのは、ウクライナの人々だけではありません。戦争が始まってから、ロシア人を差別する動きが世界中に広がりました。日本国内では、ＪＲのある駅でロシア語による案内表記が紙で覆い隠される出来事がありました。音楽界も例外ではありません。世界最高峰とされるチャイコフスキー国際コンクールの連盟からの除名や、ロシアの音楽家の公演招待のキャンセルなどが相次いで起こっています。ロシアとウクライナどちらの国の曲を演奏することが正しいのか。私が演奏者の立場になったらこの問いに対する答えを出すことができないでしょう。それは私自身、ロシア出身の作曲家や演奏家が創り出す音楽を素晴らしいと思ってきたからです。確かに、戦争を起こしたロシアを批判する声は理解できます。けれども、国民一人一人への批判や憎悪を重ね、美しい音楽や才能を潰す世界は間違っています。国への批判だけでなく、戦争自体に抗議の声を上げるべきです。そして、その時こそ互いを平等に見つめられる音楽の精神が真の平和を訴える力になるのです。

音楽には人の心を動かす力がある。世界に平和と希望をもたらす力がある。私はそう信じています。だからこそ、音楽部の大切な仲間やこれから出会う人とともに、音楽の力を信じ、互いに勇気と笑顔を分け合える世界が訪れるよう心から願って、歌を歌い続けていきます。